



〒892-0841 鹿兒島市照国町13-42 カトリック鹿兒島司教区 電話099 (226) 5100 振込口座 02030-2-8359 編集発行 教区広報部 1部60円年間千共1100円



罪人への神の寛大さに感謝!

司教座教会で主にささげると二十四時間実施

世界各地で、教皇奨励による四旬節第四主日前の金曜日と土曜日(三月四日)

五日に「主にささげると二十四時間」が行われた。鹿兒島教区では教皇の呼びかけにこたえ鹿兒島カテドラル・ザビエル教会で四日午前九時から翌五日の午前九時まで聖体礼拝を実施し、周辺小教区の信者が三十分単位で、それぞれが参加できる時間に足を運び祈りをささげた。



3月4日午前9時から始まった聖体礼拝

聖年は、罪人に対する神の寛大な振る舞い。今の世の中は正義を貫こうとしてもその正義自身が危うい。だからこそ正義を超えたいつくしみが大切」とメッセージを送り、「この聖体礼拝を特別聖年を充実させるきっかけにするように」と語った。翌朝までの二十四時間の間には教皇の大勅書の朗読と黙想、ゆるしの秘跡、ロザリオ、聖ファウステイナゆかりの「神のいつくしみへの祈りの花束」、十字架の道行きなどが行われた。そして五日の締めくくりのミサで郡山司教は「毎月第一木曜日にカテドラル

いかがですか? いつくしみの祈りの集い

「いつくしみの祈り」この信心は、ポーランドのシスター聖ファウステイナ・コヴァルスカ(一九〇五-一九三三年)にイエスが出現し、命じられたことに基づいている。郡山司教は特別聖年の期間中「神のいつくしみへの祈りの花束」をささげるよう勧められており、すでにこの呼びかけを実践する集いが誕生し活動している。(括弧内は頁番号)

さて、このバアルを信じる者たちはバアルを「バアル・ゼブル(崇高なるバアル)」と呼び、崇拝していました。しかし、イスラエルの民はこの言葉を「バアル・ゼブブ(蠅のバアル)」と捉えて揶揄していました。この呼称が定着し、後世に至るとバアルゼブルと発音がなまり、やがてバアルゼブルと呼ばれる悪魔に位置づけられたと考えられています。

福音書の中でイエス様は何度も「バアルゼブルの力」で悪霊を追い出していると

教区人事

- ▲泉浩二神父(鴨池教会・会計及び広報部長)は、現職のまま司教総代理
- ▲小川靖忠神父(紫原教会・司教総代理)は、YBU本部(京都)へ
- ▲鈴木康由神父(吉野教会)は、紫原教会主任司祭
- ▲アントニオ鄭法鐘(チヨン・ポプ・チョン)神父は、吉野教会主任司祭
- ▲栃尾泰英神父(大熊教会)は、種子島教会主任司祭
- ▲グエン・ホグ・ナム神父(瀬留教会)は、大熊教会主任司祭
- ▲美島春雄神父は、教区本部付き
- ▲坂本進神父(溝辺教会)は、瀬留教会主任司祭

修道会便り

- ▲福岡英雄神父(レデンプトール会・母間教会協力司祭和泊教会担当)は、母間教会主任司祭
- ▲テヨドル・メニツヒ神父(レデンプトール会・母間教会主任司祭)は、母
- ▲ノヴェナ(九日間の祈り) 聖金曜日から始める。神のいつくしみへの祈りの花束を用いた「このノヴェナによって、わたしはあらゆる可能な恵みを靈魂たちに与える」(七九六)
- ▲ご絵への崇敬 「この絵を崇める靈魂は決して滅びないと約束する」(四八)
- ▲「青白い光線は靈魂を義とする水を表し、赤い光線は靈魂の命である血を表す」(二九九)
- ▲いつくしみの祈りの集い

- ▲末吉卓也神父(事務局長・始良教会)は、溝辺教会主任司祭兼務
 - ▲サントス・ホセ・リザール神父(神言会・加世田教会)は、多治見修道院
 - ▲ステイブ・バラスバス・プリミティボ神父(枕崎教会)は、加世田教会主任司祭
- ※着任は四月一日付

間教会協力司祭和泊教会担当
▲松永正男神父(コンベンツアル会・古田町教会主任司祭)は、現職のまま古仁屋教会主任司祭兼務
▲久保芳一神父(古仁屋教会担当)は、古田町教会協力司祭

「三時に、わたしの慈しみを懇願しなさい、特に罪人たちのために」(一二二〇)
いつくしみの祈りの集い カテドラル主聖堂で、毎月第二土曜日に神のいつくしみの祈りの花束を祈る集いを行っています。四月は九日、午後二時から三時半まで。内容は聖体礼拝、祈りの花束、いつくしみの黙想。参加は自由です。足をお運びください。(末吉卓也神父)

神学生の動向

ピアンネ・イ・ビヨンドク神学生が韓国で三月一日(火)祭壇奉仕者に、霧島彬神学生がローマで三月十三日(日)朗読奉仕者にそれぞれ選任された。また神学生はザビエル教会で三月十九日(土)に助祭・司祭候補者に認定された。

鈴木神父のやさしいみ言葉

力比べだけではありませぬ。イスラエルの民はバアルの信仰だけではなく、その習俗をも忌み嫌っていたのです。彼らの信仰によればバアルとは乾季の間は黄泉に下っているのですが、雨季が始まると共に地上に現れます。そして、このときに地上の女神たちと行う性交により作物が豊かに実る、と

アルの神殿内部には男娼の家があった、とも言われています。こうしたことが争いを熾烈化する背景にあったことは容易に想像できます。

福音書の中でイエス様は何度も「バアルゼブルの力」で悪霊を追い出していると



教区青年会の集い
教区青年会(岩崎信幸会長)は、4月24日(日)午後2時から、「教区青年会の集い」を本会2階会議室で行います。軽食も歓迎です。お申し込みは、お電話099-226-5100まで。お申し込みは、お電話099-226-5100まで。お申し込みは、お電話099-226-5100まで。

第二章 「成長する福音」

レデンプトール会 谷山教会主任司祭 トマス 頭島 光



旅する教会

これまで「福音宣教とは何か」という比較的大きな視点から大上段に構えて眺めてきましたが、ここからは「教会」をひとつの共同体として捉えたいと、

「福音を宣べ伝える」教会がその宣教活動において、いかに「福音宣教」(今後「エヴァンゲリゼーション」つまり「福音化」と呼ぶ)という事柄を展開し成長させるのか、という視点から捉えることにします。言い換えれば、「福音化」という出来事をひとつの波に例えれば、実際に教会共同体の中でそれがどのように理解され、また展開し、かつ成長していくものであるかをみる、ということになるでしょう(「福音の喜び」111-114参照)。

一九六五年十二月八日に、閉幕した第二バチカン公会議は「福音化」の主体である教会を「旅する民」と表現しました。旅に出るとき、まさに人は誰でも自分がどこに向かつて歩いていくのか、また何のために出向いていくのか、明らかに、その旅の意図ないしは目的をもって行っているものです。その意味では、「旅する教会」とは、まさに神の声に聞き従い、貧しい人々のために福音を告げ知らせるといふ偉大な使命を担いつつ、神に向かつて歩む共同体であるはずで、「福音化」は、決して一人で孤独のうちに、為し遂げられるような事柄ではありません。福音を宣べ伝えるとい

う業は「人類を内部から変化させ、新しくすることであり、そのために「異文化と出会い、これを再生させる神の御業」だからです(『福音をのべ伝える』18-20参照)。

この世の社会的な不正を正し、文化の中の良きものをさらに高めていく「旅する教会」は、あたかも『ノアの方舟』のようです。つまり、箱舟の中に入っているものは、しっかりと外の世界から守られていて、同時にいつかはそれらが外の「人々に聞かれ、受け入れられ、ついには同意を起させる」(福音をのべ伝える)「23」ものだからです。こうして「旅する教会」は、福音という神の宝を共同体という箱舟にしっかりと納め、新しい生き方を目指して旅を続ける「福音共同体」なのです。

「時が満ち」、イエスが私たちの間に人となつて現れたように、神は御子を通して一人ひとりを呼び出し、福音という宝を授けられました。福音という宝を積んで旅を続ける教会共同体は、今まさにキリストを知らない人々の所にも出かけて宣べ伝えるためです。そのために私たち一人ひとりは常に教会から派遣されているのです。神による救いの恵みは罪深き人間にとつて大いなるいつくしみと憐みに満ちています。なぜなら、この恵みによって人間は、

私の口に福音を上らせ、神の愛を語らせることだからです。聖霊はキリストの福音を私たちに心から悟らせる神の力なのです。

愛の共同体

人は決して独りでは生きられません。人は誰かに寄り添い合いながら、愛によって生きるものだからです。愛が私たちを生かし、愛されるから共に生きられるのです。あなたと私、そして彼と彼女、互いに愛し合うから生きていけるのです。こうした愛の共同体であり続けるならば、「神の国」につながるならば、このように相互愛の共同体を作ること、これを初めから配慮されたのは、実は神ご自身でした。この神の愛の共同体としての神秘を、私たちは信仰において悟る必要があります。その究極の目標は、共同体が信仰をもつて互いに愛し合つて生きることであり、そこに神の愛が輝き出るからです。こうした愛の共同体はさらに成長し、福音を宣べ伝える共同体となつて、神の国に向かつて歩む、まさに真の教会

となることでしょうか。しかし、もしこの愛の共同体が神の国とつながらうとしないなら、それは人間的な関わりに終わってしまいます。確かに、人を愛することで個として徳を天には積むことになるでしょう。そして、その結果として天国に入る、という従来の教えに導かれるでしょう。しかし、それではイエスが語ってきた福音を真に理解したことにはなりません。イエスは私たちに「神の国とその支配」(マタ6・33)を実現するようにと求めています。イエスは「神の国とその支配」がすべてに及ぶことを目指し、弟子たちを呼び集められ、愛の共同体を作ったのです。教会が皆のための「兄弟愛、正義、平和、尊厳の場となる」(「福音の喜び」No.180)ようにと教えているのです。イエスは、そのために私たちに向かつて「神の国は近づいた」(マタ10・7)と宣言し、

変革を求めて福音化運動を始められたのです。

「旅する民」と表現しました。旅に出るとき、まさに人は誰でも自分がどこに向かつて歩いていくのか、また何のために出向いていくのか、明らかに、その旅の意図ないしは目的をもって行っているものです。その意味では、「旅する教会」とは、まさに神の声に聞き従い、貧しい人々のために福音を告げ知らせるといふ偉大な使命を担いつつ、神に向かつて歩む共同体であるはずで、「福音化」は、決して一人で孤独のうちに、為し遂げられるような事柄ではありません。福音を宣べ伝えるとい

「旅する民」と表現しました。旅に出るとき、まさに人は誰でも自分がどこに向かつて歩いていくのか、また何のために出向いていくのか、明らかに、その旅の意図ないしは目的をもって行っているものです。その意味では、「旅する教会」とは、まさに神の声に聞き従い、貧しい人々のために福音を告げ知らせるといふ偉大な使命を担いつつ、神に向かつて歩む共同体であるはずで、「福音化」は、決して一人で孤独のうちに、為し遂げられるような事柄ではありません。福音を宣べ伝えるとい



「旅する民」と表現しました。旅に出るとき、まさに人は誰でも自分がどこに向かつて歩いていくのか、また何のために出向いていくのか、明らかに、その旅の意図ないしは目的をもって行っているものです。その意味では、「旅する教会」とは、まさに神の声に聞き従い、貧しい人々のために福音を告げ知らせるといふ偉大な使命を担いつつ、神に向かつて歩む共同体であるはずで、「福音化」は、決して一人で孤独のうちに、為し遂げられるような事柄ではありません。福音を宣べ伝えるとい

「旅する民」と表現しました。旅に出るとき、まさに人は誰でも自分がどこに向かつて歩いていくのか、また何のために出向いていくのか、明らかに、その旅の意図ないしは目的をもって行っているものです。その意味では、「旅する教会」とは、まさに神の声に聞き従い、貧しい人々のために福音を告げ知らせるといふ偉大な使命を担いつつ、神に向かつて歩む共同体であるはずで、「福音化」は、決して一人で孤独のうちに、為し遂げられるような事柄ではありません。福音を宣べ伝えるとい

+KABAYAN SEKSYON+
Ang Pagsali sa mga Dukha sa Lipunan

"Bawat Kristiyanong indibidwal at bawat pamayanan ay tinatawag na maging instrument ng Diyos para sa paglaya at pagtatampok sa mga dukha, at para bigyan sila ng kakayahang maging ganap na bahagi ng lipunan. Kailangan marunong tayong gumalang at makinig sa hikbi ng mga dukha at dulutan sila ng tulong. Isang sulyap lamang sa Kasulatan at agad makikita natin na kalooban ng mapagmahal nating Ama na pakinggan ang daing ng mga dukha: "Akin ngang nakita ang kadalambhatian ng aking bayan na nasa Egipto, at aking dininig ang kanilang daing dahil sa mga tagapagpapatag sa kanila: sapagkat talastas ko ang kanilang kapanglawan. At ako'y bumaba upang iligtas sila...at ikaw ay aking susuguin" (Ex 3:7-8,10). Makikita rin natin ang kanyang malasakit sa kanilang pangangailangan: "Ngunit nang dumating ang mga anak ni Israel sa Panginoon, ibinangon sa kanila ng Panginoon ang isang tagapagligtas" (Hkm 3:15). Kung tayo ang kasangkapan ng Diyos para mapakinggan ang mga dukha, at magbibingi-bingihan sa kanyang panawagan, sinasalungat natin ang kalooban at plano ng Ama: ang taong dukha "ay dumaing sa Panginoon laban sa iyo, at maging kasalanan sa iyo"(Dt.15:9). Ang kakulangan sa malasakit sa kanyang mga pangangailangan ay may tuwirang epekto sa ating ugnayan sa Diyos: "Kapag isinumpa ka niya sa tindi ng kanyang pagdaramdaman, diringgin ng Lumikha ang kanyang panalangin"(Sir 4:6). Muling bumabalik ang lumang tanong: "Sa sinumang may kabuhayan sa mundong ito at nagsasara naman ng kanyang kalooban sa kanyang kapatid na napansin niyang gipit, paano mamamalagi sa kanya ang pagmamahal ng Diyos?"(1Jn 3:17). Balikan natin kung paano tahasang nagsalita si Apostolo Santiago tungkol sa pagtanggap ng inaapi: "Sumisigaw talaga ang lupa ng mga mangagawang gumapas sa inyong mga bukid dahil ipinagkait ninyo ito, at umabot sa pandinig ng Panginoong Sabaot ang daing ng mga nag-ani sa inyong bukid" (5:4)

ザビエル書院から本の紹介

桃菌助祭推薦
**「神とともにある生活
キリスト教典礼の内的風景」**
石井祥裕著
パピルスあい 税別 1,600円

著者は上智大学神学部講師で、主日ミサ用「聖書と典礼」の編集長。とても読みやすいキリスト教信仰解説書。生活に即した考え方が分かりやすく書かれている。ぜひご一読ください。
今年度も書院をよろしくお願ひします。

会と催し (4月)

1日(金) 復活の金曜日
2日(土) 復活の土曜日
3日(日) 中野裕明神父叙階記念(一九七八年)
4日(月) 司祭のメリア運動・ザビエル教会・13時
5日(火) 復活節第二主日(神のいつくしみの主日)
6日(水) 神のお告げ
7日(木) 鹿児島市内主任司祭会・教区本部・15時
8日(金) 成相明人神父霊名(聖ラサール)
9日(土) いつくしみの集い・ザビエル教会・14時
10日(日) 復活節第三主日
11日(月) 司祭評議会・教区本部・14時
12日(火) 教区司祭会・教区本部・16時
13日(水) コンベンツス・教区本部・10時
14日(木) 久保芳一神父叙階記念(一九七五年)
15日(金) 復活節第四主日
16日(土) 世界召命祈願日
17日(日) レジオマリエ・教区本部・13時
18日(月) 松森孝郎神父叙階記念
19日(火) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
20日(水) アン神父叙階記念(二〇〇六年)
21日(木) 復活節第五主日
22日(金) オリブの会・教区本部・14時
23日(土) 西山達也神父霊名(聖フィデリス)
24日(日) 聖マルコ福音記者
25日(月) マイエル神父命日(一九七八年)
26日(火) アッシュヤー神父叙階記念(一九六八年)
27日(水) 萩原義幸神父叙階記念(二〇一〇年)

祈りの意向

【ノベナ】 新たな環境に身を置く社会人・学生・子どもたち(4日・13日)

【祈祷の使徒会】 世界共通の祈り
・小規模農家の人々
・アフリカのキリスト者
・新年度の挑戦
・日本の教会

食から学んだ命の尊さ!

奄美カトリック女性連盟研修会

2月28日(日)奄美カトリック女性連盟では研修会を名瀬浦上教会で開催しました。

講師には、新潟糸魚川教会の伊藤幸史神父様(東京教区)をお願いしました。

昨年5月、日力連の熊本総会での講演を拝聴し、奄美の仲間にもぜひ聞かせたい、教えて頂きたい、この感動を分かち合いたいとの思いで神父様に「ぜひ奄美で講演を」と依頼して実現しました。

「他の生命」を頂くこと、私の命のために他の生命体が自分を犠牲にしているということ、食卓を整えることを深く考えることによって「生命」の尊さを学び、他の生命も自分の生命も大切にしなければならぬこと、そして私達キリスト者はそこに「愛がなければ無に等しい」という信仰の土台を教えて

頂きました。

この研修会は前日に地元新聞でお知らせしたこともあり、浦上教会会場いっぱい、その再現である「ミサ」、パンと葡萄酒という「食べもの」を私たちがご聖体としてキリストを頂きます。人が生きるということは日々の食卓で「愛がなければ無に等しい」という信仰の土台を教えて

諸宗教者と祈りの駅伝に出走って

鴨池教会主任司祭 泉 浩二神父

2月21日(日)京都市民マラソンの中で実施された「祈りの駅伝」(インターフェイス)部門に参加した。これが三回目の駅伝になるらしいが、昨年郡山司教が参加し、今年は私にそのタスキが渡され出場することとなった。

42・195キロを走る

ていたら、「愛情込めた食事は非行に走った子供たちこそ必要」「いろいろな情報社会の中でこれからは信仰生活を心にきざみながら、食品、食べ物の一つひとつの育つ段階に感謝しながら大事な生命の源である食事に励まなくては」「このような話はカトリック

ク信者だけでなく一般の方にも聞いて頂きたい。聞かせてあげたい」など感謝と感動が聞かれました。このような研修会ができたことを役員一同、伊藤神父様と神様に感謝です。

(奄美カトリック女性連盟 事務局 久保正子)

苦しければ苦しいほどそれが力になったように思う。

時間が経ち振り返ってみると、毎日の生活においても同じことを繰り返しているように思った。いつも手を差し伸べ、ともにいてく

ださる方がいる。今回の体験とは反対に、常に私たちの手、支え、寄り添いを必要としている人がいて、その人たちに勇気、力をいろうんな形で与えることができていることを体験することができたように思った。

また大会前日には、本願寺本殿で世界のそして諸宗教間の平和、東日本大震災復興のための祈りがささげられた。

マリア・ポリ2016

5月3日(火)～5日(木)

場所 南薩少年自然の家

問合せ フォコラーレセンター

TEL 095(849)3812

直 TEL 090(5026)5921

ネットワーキングミーティングに参加

教区事務局長 末吉卓也

二月二十七日(土)から二日間、愛媛県松山市で行われたネットワーキングミーティングに岩崎信幸さん(谷山)と高竿祐貴さん(吉野)と共に参加した。

これは、カトリック青年の「情報交換と交流」を目的に年二回、教区持ち回りで行われているもので、今回の参加者は全国から百二十人余りで、郡山司教も毎回出席している。

この集いの後の青年連絡協議会運営委員会でも青年たちが教会の交わりのため、積極的に議事を進めていて、その姿に感動した。このような交流がすでに十六年も前から続いていることを知って嬉しくなり、希望を持った。

今回のテーマは「めぐる人生という巡礼の旅」。高松教区の皆さんが全国の青年のために祈りと多くの時間をかけて用意してくださったことがよく分かる中身の濃いプログラムだった。

鹿兒島では小教区を超えた青年会の集いは月に一度、主に日曜日に教区本部で行われている。参加者はいつも四、五人ほど。会長

鹿兒島純心 川上 和

幾度もいつくしみ重ね梅香る

うぐいすやどこから呼んでる今朝の幸

紅梅を活けて迎える四句節

バランタイン胎より出でて八十路かな

誰もかも神の作品春うらら

友逝きて遺せし紅梅ただ咲きぬ

ミサ集い心なごむや春と日

ひとり居の雛を飾りて悦に入る

司教執務室便り

若者の祭典「WYD」

今回のワールドユースデーに向けての準備が進んでいる。福岡、関西、成田の各空港から出発が予定されている。出発は七月二十三日(土)だが、日本の大学はまだ学期中ということもあって、参加者は今のところ四十人と少ない。締め切りの四月十二日(火)に近いのもう少しは増えるものと思われるが、二〇〇八年のマドリッド大会の四百人に遠く及ばないものと思われる。

それにしても、世界に通じない日本の学期編成は、伝統とはいえ、何とかならないものかと思ったりもする。日本の青年だけが排除されているようで悲しいような悔しいような感じがするのは当人たちにとっては同じではないかと思う。

ところで、先月の準備会を見たビデオは、細切れの紹介だったとはいえ、「美しい国」との印象が強く残った。そして、「多くの若者が見てきてほしい」と心底思った。

会議では、鹿兒島教区でも配布された「いつくしみのチャプレット」も紹介され、大会では毎日唱えられるのだという。日本での普及は一部の人々にとどまり、まだまだなじみのないお祈りだけに戸惑いも感じられた。

「イエス様が、『この祈りをしなさい』とファウスティナに言われたのです。」ポーランド人司祭の確信に満ちた言葉が印象的だった。信者ならだれでもロザリオと同じように親しみ、毎日唱えているのだという。聖ヨハネ・パウロ二世もお祈りの推進者だと聞けば、日本でも広まってほしいと思う。普及が進まないのはアジアの国では日本だけと聞けば、信心推進派の一人として取り残された感じがしないでもない。遠いポーランド教会の伝統とはいえ、「イエス様推奨のお祈り」という新しいお祈りの仕方を学んできてほしい。

今回のテーマは、「あわれみ深い人は、幸いである、その人は憐みを受ける」(マタイ五・七)。いつくしみの聖年にふさわしいテーマだ。多くの参加者があるよう祈っていたきたい。



市民マラソンの参加者は1万6千人。その中に私たちの駅伝参加者は一チーム4人の10チーム40人。私はAチームの2区(10・85キロ)を任された。私にタスキを渡す1区の走者は、トルコ人のイスラム教徒。また私がタスキを渡す3区の走者は、法華宗のお坊さん。そして最終4区は、神社の神主さんという具合。要するに参加者40人がそれぞれに異なる宗教者で、それぞれ一本のタスキをつなぐことを通して平和を願うのが「祈りの」と言われるインターフェイス(諸宗教間交流)駅伝である。

1区の走者到着を待つ間の何とも言えない緊張感。タスキをもらい人と人の間を走り抜ける何とも言えない気持ち。3区の走者に祈りの気持ちを通してタスキを渡す感動。そして何よりも感じたのが、沿道で声援を送ってくれる人たち、手を差し出す人たちからもらった力。辛ければ辛いほど、

文芸

短歌

国分教会 市来 房枝

全身が気高く悪寒覚えし夜ルルドの水の

封を切りたり

鹿兒島純心 川上 和

契約の新たないのち輝きて世界を照らす

光となれり

始良教会 川口 節子

告白のシャワーを浴びて聖霊に導かれ行く

至福えの道

主の神秘天使も人も悟り得ぬ幼子の如生

かされるのみ

俳句

鹿兒島純心 川上 和

幾度もいつくしみ重ね梅香る

うぐいすやどこから呼んでる今朝の幸

紅梅を活けて迎える四句節

バランタイン胎より出でて八十路かな

誰もかも神の作品春うらら

友逝きて遺せし紅梅ただ咲きぬ

ミサ集い心なごむや春と日

ひとり居の雛を飾りて悦に入る

紫原教会 山下和実

2月6日(7日)、教区本部で「正義と平和協議会」主催の練成会が実施された。講師は林尚史神父(イェズ会)で、参加者は全部で16人であった。鹿児島市以外では、南さつま市、奄美市、それに大分県からの参加者がいた。

初日(6日)は、オリエンテーション、参加者全員自己紹介、講話(第1回)・正義と平和協議会の紹介(スライドを使用)・講話(第2回)が教区本部の会議室で行われた。夜は、場所を変えて交流会を実施した。

二日目(7日)は、講話(第3回)の後、ザビエル教会の小聖堂でミサをささげ、昼食を済ませて解散した。短い時間での練成会であったが、中身の濃い充実したものになった。参加者の一人は、「教区の多くの方々に聞いてもらいたい」と感想を述べていた。たくさんの方が参加できるように、定員を増やしてほしいという要望もあったが、主催者の意向で人数を15人に限定して行うことになった。終了後には、少人数での集いがふさわしいことが分かった。それは、講師と参加者との深い交わりと分かち合いができたからである。多人数で行うと、講師から参加者への一方通行になることが多い。

今回の小規模練成会では、講師との交流、参加者同士の交流を図ることができた。交流会では信仰の話だけでなく、方言、食べ物、仕事のことなどについても語り合うことができた。また今回は、奄美在住で「辺野古埋め立て土砂搬出反対運動」に取り組んでいる大津さんが参加したことも良かった。

信仰が現実と遊離し、聖堂の中に留まっている限り、福音は広がらない。「神の国」は実現しないだろう。「先ず動かなければ、風は吹かない」現場に出かけなければ、福音の風は吹かない。身近なところから行動することが大事であると思った。現実と向き合うことを徹底したのがイエスである。イエスは根源的(ラディカル)である限り、過激派(ラディカリスト)ということになる。

林神父は「聖書の読み方がぬるい」とも言われた。今回引用された聖書の箇所を今までのように読んでいたのかを反省してみた。聖書が本当に信仰を生きたための書になっているのだろうか。実践を伴わなければ、知的欲求のための書物にすぎないのではないのか。今後社会問題に取り組むためには、聖書大好き人間になり、その上で「現代世界憲章」を理解する必要があるだろう。今回の練成会では、林神父の信仰生活方を知ることを通じて、自分自身の信仰を振り返ることができた。これが最大の収穫である。

カトリック正義と平和協議会

鹿児島錬成会報告

「正義と平和協議会」に毎年参加している一般の方で、カトリック教会への期待(例えば、現代世界憲章を具体化した文書を作成してほしい)や奄美の現状と歴史について話を聞くことができた。奄美地域は鹿児島教区に属するが、沖繩と同様に歴史的に差別を受け、宗教的迫害があつた地域である。歴史を十分に認識した上で、福音の視点で沖繩の諸問題に取り組むべきであると感じた。また大分教区から鬼束さん(奉獻生活者)も参加された。正義と平和協議会の「脱核部会」のメンバーである。九州内で脱原発に取り組んでいる方と交流できたことも良かった。林神父の講話は「福音つ

てなんだ これだ！」というテーマで行われた。現場で多くの人と関わってきた経験がふまえて、沖繩・原発・在日外国人・聖書など多くの内容が具体的に語られた。教会内外での苦い体験もたくさんあるようだが、さらっと話をされ前向きに行動する姿を羨ましく思った。盛りたくさんの内容の中で、印象に残ったことをいくつかあげたい。

講話で強調されたことは、今の現実と「向き合う」ことの大切さである。向き合うことは、自分の頭で思考し発言することであり、現実と関わることに繋がってくる。キリスト者は政治・経済・文化の現実に関心を持ち、反福音的動きに対して敏感であるべきだ。

谷山教会 本村裕之
林尚志神父さんが「動かなければ風は吹かない」と、そして「向き合えばいのち流れる」と言われました。「向き合わなければ思考停止」とも。これは国と国とでも、人と人でもそうだと思う。たとえ考え方が違っても受け止め合えれば、そこにいのちが流れる。逆

に相手に無関心なところへの流れる。まさに今の世の中がそうなっています。確かに自分のことだけから言って神さまを信じる私たちが「政教分離だから口出ししてはいけない」と考え、黙ってしまえば、それはまさに「神さまとの関わり、隣人との関わり」を無視することになります。歴史的に見ても、むしろ政治権力が宗教を利用したことが問題で、戦時中に戦争遂行のため大本宗教報国会が結成された歴史もあるわけです。私たちは常に神さまを肌で感じ、神さまに耳を傾けながら、隣人のために犠牲になることを恐れず、ちよつとずつ出来ることを積み重ねていく。そこに呼ばれているように感じています。

出席者感想

です。自分の現実・日常に埋没して、ともすれば近視眼的になり、世の中の動きに不安や疑問を抱きながらも、立ち止まって考えたり調べたりする余裕のないまま日々を重ねています。今回の錬成会に参加して、最も印象的だったのは、歴史認識の欠如は交わりの始まりを損なうということでした。

国と国との関係でも、相手を知ることが知らず努力することがなければ、対話の道は開かれませんが、対話がなければ平和を実現することは困難です。知ることが、考えること、そして発言すること、これらは他者とながら互いに励まされ、刺激し合うことによつて持続することが可能になるのだと思います。信仰とは生き方だとの林神父様のお言葉をしっかりと保って、創造主である神を父と呼ぶ者として少しでも良く生きたいと思えます。(い

吉野教会 浜崎純利
林神父様のお話はその全身から湧き出てくる言葉、魂が、私の心に染み込んできました。このように自分達だけに留めておけないと強く思いました。素晴らしい情報こそより多くの仲間が聞いてもらいたいと魂が動かされました。苦勞(体、心)は、後々の生き方に影響します。苦勞知らずの方々には頭では分かるでしょうが、経験したと、経験していないでは、身近におられる痛みのある方々への見方が少し違うのではないのでしょうか。今の世相をどうよみとつていくかです。林神父様

事務局長様にもご参加頂き共に社会問題と福音について分かち合えたことは大きな喜びでした。

昨今の日本の社会状況は福音から遠ざかり命が大切に



東京にいると、「地方は情報が少ない」という話をよく耳にします。だから情報糸口になるものを出前しよう、というのが正義と平和協議会の錬成会の意図のひとつです。しかし今回は情報が少ないどころか、鹿児島教区の皆さんの社会問題に対する意識の高さに、驚きました。デモに参加されている方もおられるようでした。奄美からおいでになった大津さんの活動にも驚きました。

鹿児島で林神父様の練成会を行い、日本カトリック正義と平和協議会について、紹介する機会を頂きお礼申し上げます。1970年に司教団の呼びかけで組織されてから45年、各教区、地区で「正義と平和」の活動が活発に行われています。新しく始まった鹿児島教区正義と平和協議会の皆様はじめ郡山司教様、末吉事務局長様にもご参加頂き共に社会問題と福音について分かち合えたことは大きな喜びでした。

林神父様は呼びかけます。「若者の発言のないところに死の匂いがし、女性の発言のないところに命が枯れる。命を守るキリスト者こそ、命を産み育む女性だからこそ、今、発言しよう」と。

にされている実感が失われている毎日です。できることは限られています。同じ思いを持つ仲間たちが元気に活動できる応援を私ども事務局は行っていきたいと思えます。(二か月に一度、「JP通信」というニュースレターを発行しています。関心のある方には見本紙をお送り致しますので、お問い合わせ下さい。)

毎年、「正義と平和協議会」を各地の正義と平和の活動者と教区の多大なご協力を得て開催しています(昨年は東京。いつの日か、鹿児島で全国の仲間と集える集いが持てることを希望しています。)

ザビエル教会 田原京子
まあ、なんとそのエネルギーが素晴らしい。八十二歳とは思えない林尚史神父様でした。手振り、身振り、身体中で表現され、その爆発的な話しぶりで、私たちがグイグイと引き込み、あつという間に半日が過ぎて行きました。「福音つてこれなんだ。これだ！」まさにそのスピード感、話は現代に留まらず、過去の歴史を紐解き、聖書の行間に秘められた神のメッセージを読み解いて行く。政治はもろろん、戦争と経済の関係性、原発の問題にまで言及してゆく。が、しかし話は機知に富みユーモアがあつて面白い。それは、歴史は苦手な私がそれ以来、世界全史という重たい本を傍らに置くくらいなのです。